

「持続可能性音声教育を目指すピア・モニタリング活動の可能性  
—対話を媒介とした言語生態の保全・育成を通して—」要旨

房賢嬉 （本学院生）

本発表は、一人で学習した内容を持ち寄り、仲間とのやりとりを通して発音上の問題を探り、その改善に向けて具体的な方策を検討するピア・モニタリング活動についての報告である。

これまでの音声教育は、教師による音声知識の伝達や発音の評価に偏って行われてきた。学習者の中には、教師や話し相手から指摘を受けても自分の問題が自覚できず、どのように問題を解決すればよいか分からぬという認知的な問題や、ネガティブな評価を受け続けることによる心理的な問題を抱えている者もいる。こうした問題は、学習者の日常生活において人間活動に十全に参加できないことや人間関係がうまく作れないという問題にもつながっている。人ととのコミュニケーションは勿論、個人内の認知活動はすべて言語に支えられながら遂行されるということを考えると、上記の問題は言語がうまく機能していないことから来る問題であると考えられる。

そこで本研究では、こうした学習者の問題を解決するために、伝達中心の音声教育から脱却し、言語の状態をよくすることによって、学習者の生活の質を向上させるという「言語生態学」の視点、及び知識は社会的に構築されるという「社会文化的アプローチ」の視点を織り込んだ新しい日本語音声教育を提案する。具体的には、言語が使われる環境（言語生態環境）における学習者の認知過程（精神的領域）と教室（社会的領域）に「対話」を取り入れることで言語が機能する状況を作り出し、それらの相互交渉による言語保全（言語をうまく機能させること）を図った。そして、「心理的領域と社会的領域の相互交渉的関係」を見るために、発音学習日記の内容と教室のピア活動におけるやりとりの関連性を検討した。本発表では、学習者が一人学習の際に得た知見がやりとりの中でどのように機能し、認知を支えているかについて分析した結果を報告する。